



みんなぞで護ろう文化財

文化財保護委員

VOL.35

坊中地区の仏教文化財

文化財保護委員長 渡邊 照義

黒川地区の坊中界限には、西巖殿寺を中心として、かつては三十六坊と呼ばれる僧房が立ち並び、山岳信仰の拠点として栄えました。

現在も西巖殿寺や僧房だった家々には、古くからの厚い信仰を物語る仏教文化財が残されています。今回はそのうちの二点を紹介します。

絹本著色阿弥陀三尊来迎図

県指定重要文化財（絵画）
所蔵 西巖殿寺

南北朝時代に製作されたもので、裏面に「恵心御筆日田永興寺常任」とあり、また大分県の英彦山霊山寺の僧侶豪継が文禄四年（1595）に求めたといえます。添付覚書によると、本来は日田永興寺にあったものが、元和二年

（1616）には阿蘇山学頭坊（現・西巖殿寺）の僧侶豪継の元に移っていたことがわかります。

阿弥陀信仰は、日本に8世紀初頭に伝わりましたが、本格的な展開は平安時代中頃です。比叡山の不断念仏や源信の「往生要集」をきっかけにして末法思想を背景に流行し始め、貴族から武士、やがて庶民まで急速に広まりました。

阿弥陀三尊とは、阿弥陀如来から見て左に観音菩薩、右に勢至菩薩を配したものを言います。観音菩薩は阿弥陀如来の慈悲をあらわす化身であり、勢至菩薩は知恵をあらわす化身とされます。

来迎とは、臨終のときに仏がその者を極楽浄土に往生させることで、迎接とも言います。

来迎図は、阿弥陀如来が多くの菩薩や天人を従えて、天上から瑞雲に

乗って臨終の者のところに現れる有様を描いたものです。

「阿弥陀如来を信じていれば、臨終に際して阿弥陀如来が極楽に導いてくれる」という阿弥陀信仰を表現するために作られました。

五百年を超える年月で図に傷みが進行していたため、平成15年度に保存修理が行なわれています。

木造十一面観世音菩薩坐像

県指定重要文化財（彫刻）
所蔵 宮岡 武治氏（坊中）

阿蘇山坊中三十六坊の一つ、妙円坊の本尊として伝えられて来たもので、全体の作風から室町時代初期に作られたと考えられます。その像容の特徴は、頭髪を結い上げ、頭には宝冠を戴いています。面相は気品高く、慈愛に満ち、柔らかな表情です。左手に水瓶を持ち、瓔珞、臂釧、腕釧

と呼ばれる装身具を身に付けています。上半身に上帛、下半身には裳をつけて、天衣をひるがえし、全体として荘嚴な雰囲気を漂わせています。

十一面観音は頭部に十一の頭を表現している変化観音の一つで前後左右に、菩薩面三面、瞋怒面三面、狗牙上出面三面、大笑面一面、頭上に阿弥陀の化仏面を持ちます。本面を合わせて十一面になるものや小面のみの配列には一段のもの、二段のもの、三段のものなど種々の像容があります。阿蘇の山岳信仰においては、仏である十一面観世音菩薩が神の姿となつて現れたのが阿蘇大明神（健甕龍命）とされ、信仰の中心になりました。

今なお旧妙円坊の宮岡家には参拝が多いといえます。



絹本著色阿弥陀三尊来迎図



頭部に11の面を持つ
木造十一面観世音菩薩坐像